

第26回
日本スポーツ整復療法学会 大会号

2024年10月

日本スポーツ整復療法学会

The Japanese Society of Sport Sciences and
Osteopathic Therapy (JSSPOT)

目 次

◆第26回日本スポーツ整復療法学会大会 大会次第	1
大会長挨拶	2
大会役員 / 大会会場	3
大会日程	5
参加者へのお願い	6
一般発表演者へのお願い	7
一般研究発表の座長へのお願い	7
一般研究発表プログラムおよび座長	8
◆第26回日本スポーツ整復療法学会大会 抄録集	9
教育講演 「モーグルスキーにおける Physio Trainer の役割～評価を中心に～」	
演者：小谷 征輝 先生（OMPT Body Create 代表）	9
特別講演 「北海道の高齢者運動教室“地域まるごと元気アッププログラム”について」	
演者：上田 知行 先生（北翔大学教授）	10
支部長講演 「日本スポーツ整復療法学会ができるまでの小史」	
演者：小野寺 恒己 先生（北海道支部長）	11
一般研究発表	12
大会開催地および発表演題数	18
編集後記	19

第26回日本スポーツ整復療法学会大会

大会次第

主催：日本スポーツ整復療法学会

会期：2024年10月20日（日）

会場：かでの 2.7(道民活動センター) 710 会議室

【大会実行委員会事務局】

日本スポーツ整復療法学会北海道支部
(〒069-0852 北海道江別市大麻東町 29-1 東町整骨院内)
E-mail: jsspot.hb@gmail.com

大会長挨拶

佐竹 弘靖

(日本スポーツ整復療法学会会長・専修大学 教授)

日本スポーツ整復療法学会第26回学会大会を2024年10月20日(日)に北海道立道民活動センターで開催させて頂くこととなりました。

日本スポーツ整復療法学会は、我が国独自の柔道整復の手法を取り入れ、怪我の整復法・固定法をはじめアスリートスポーツはもとより、レジャースポーツに渡るまでに生じる障害の施術方法や回復方法を臨床現場の事例研究をはじめとして大学研究者の科学研究に基づいた知見などからスポーツ療法学の発展・向上を図ることを目的として活動しております。

第33回パリオリンピック・パラリンピックでの日本人選手の大活躍は、スポーツへの関心を益々高めていく契機となっていくことは他言を待つまでもありませんが、環境問題やジェンダー問題などスポーツを取り巻く現実に関心が当てられたことも特筆しなければなりません。また第106回全国高校野球選手権大会でのドラマチックな熱戦、猛暑下での選手の健康維持問題や飛ばないバット導入など今後のスポーツへの取り組みも考えさせられたものと思います。

世界最高レベルで戦う選手はいうまでもなく、現場に携わるスタッフの皆さんや、現地やテレビ等で観戦する方々は、死闘を繰り広げる選手たちが不意の怪我に苦しむ様子を目にすることでしょう。そのためにも、スポーツ医・科学のサポートは競技力向上や勝敗に寄与する重要な側面を持っていると実感したはずです。それだけに、スポーツ整復療法の位置づけがいよいよ高まってくることは想像に難くありません。

本大会はスポーツに様々な立場から携わっている方々を講師としてお招きし、あらゆる視点からスポーツ整復療法について語っていただきます。

最後になりますが、学会開催にあたりまして、実行委員長であります東町整骨院の小野寺恒己先生をはじめ関係者の皆様に並々ならぬご尽力をいただきました。大変ありがとうございます。心より御礼申し上げます。

北海道の地で有意義な時間をお過ごしいただき、学会の将来像を語り合いながら親睦を深めていただければと願っております。

令和6年10月吉日

大会役員

学会本部役員

会 長 : 佐竹 弘靖
副会長 : 林 知也、小野寺 恒己
事務局長 : 小野寺 恒己
理 事 : 大木 琢也、小黒 正幸、菊地 俊紀、行田 直人、草野 久一、古賀 智、
住田 卓也、高須 英世、千足 耕一、西原 清、藤田 英二、森 経介
監 事 : 橋口 浩治、藤本 浩一

大会実行委員

大会長 : 佐竹 弘靖
実行委員長 : 小野寺 恒己
委 員 : 佐藤 勇司、片平 信彦、栗井 俊安

大会会場

会場：かでの2・7(道民活動センター) 710会議室 札幌中央区北2条西7丁目

<https://www.meiji-s.ac.jp/>

交通：新千歳空港より、JRエアポート「新千歳空港駅」乗車～「札幌駅」下車（約40分）

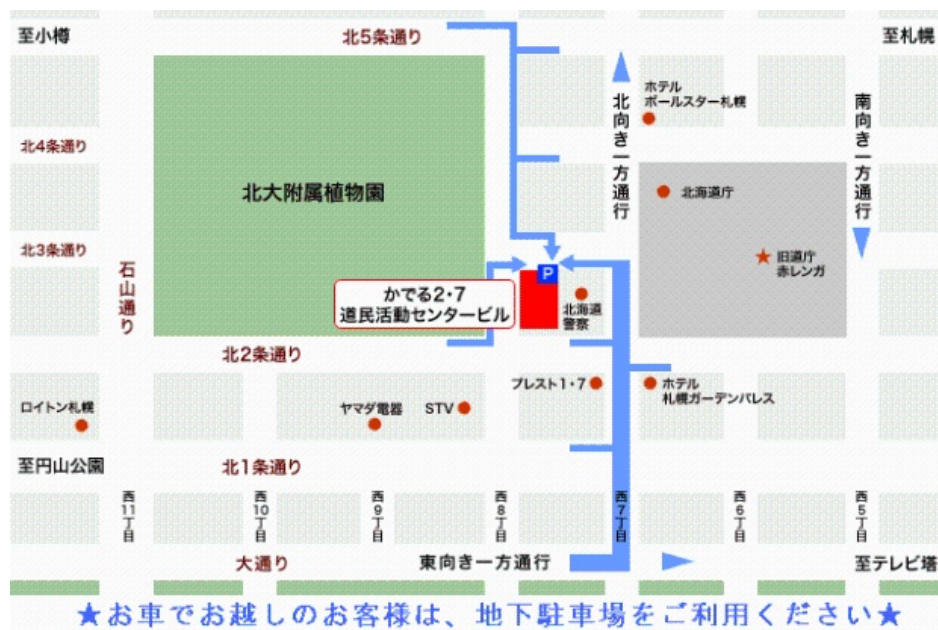
JR「札幌駅」より徒歩約11分

バス：空港連絡バス（北海道中央バス・北都交通）

新千歳空港 ⇔ 「道庁正門前」（最寄り停留所）（約80分）

※札幌駅周辺のバス乗り場・降り場が複雑になっているので、札幌市のホームページ等でご確認ください。

札幌市ホームページ <https://www.city.sapporo.jp/sogokotsu/kasetsubus.html>



会場案内図

7F



エレベーター



男子トイレ



給湯室



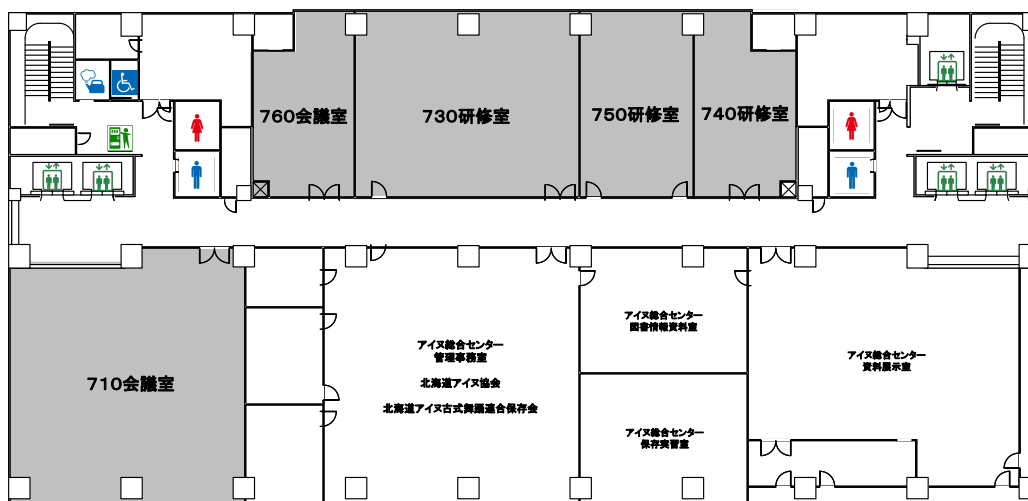
身障者用トイレ



女子トイレ



飲料水自動販売機



かえる27

公共施設の7階の710会議室において理事会、大会、特別講演、総会を開催します。
玄関を入りましたら7階の710会議室で受付してください。

- ※1. 休憩室はありません。
- ※2. 2Fに軽食喫茶（カフェド・マデラ）があります。
- ※3. 近隣にコンビニ（ファミリーマート）があります。
- ※4. 近隣の旅館内及びホテル内に飲食店があります。
北側に「中村屋旅館」、南側に「ホテル札幌ガーデンパレス」

大会日程表

大会前日：10月19日（土）

16:30～17:30	理事会	710 会議室
18:00～20:00	懇親会	

大会当日：10月20日（日）

9:10～	受付開始	710 会議室前
9:35～9:40	開会式	710 会議室
9:40～10:20	一般発表 1～4	710 会議室
10:30～12:00	教育講演 「モーグルスキーにおける Physio Trainer の役割～評価を中心に～」 演者：小谷 征輝 先生（OMPT Body Create 代表） 司会：林 知也（明治国際医療大学）	710 会議室
12:10～13:00	総会（13:00 まで）	710 会議室
	昼休憩	
13:10～14:40	特別講演 「北海道の高齢者運動教室“地域まるごと元気アッププログラム”について」 演者：上田 知行 先生（北翔大学教授） 司会：千足 耕一（東京海洋大学）	
14:50～15:20	一般発表 5～7	710 会議室
15:20～16:00	支部長講演 「日本スポーツ整復療法学会ができるまでの小史」 演者：小野寺 恒己 先生（北海道支部長） 司会：佐藤 勇司（佐藤接骨院）	710 会議室
16:00～16:10	表彰式・閉会式	710 会議室

ー参加者へのお願いー

1. 演者もしくはコレスポンディング・オーサー（責任著者）は、本学会の会員で本年度の年会費および大会参加費を納めた者に限ります。本学会の会員外の方は、演者と共同研究者の全員が臨時会員として大会に参加する 必要があります。

	前納参加費	大会当日参加費
正会員・賛助会員	3,000円	4,000円
学生会員	無料	無料
臨時会員	5,000円	5,000円
学生臨時会員	—	1,000円（学生証提示）

2. 参加者は大会受付で名札を受け取り、会場内では必ず名札をお付け下さい。
3. 演者に対しての質問は、挙手をして座長・司会者の指示に従って下さい。座長・司会者より指名を受けた場合には、「所属」と「名前」を告げた後に発言して下さい。
4. 講演中は、携帯電話やスマートフォンをマナーモードにお切り替えください。
5. 講演中の写真撮影、ビデオ（動画）撮影、録音等、また SNS への投稿やインターネット上へのアップロードは固くお断りいたします。

宿泊施設の手配

各自で直接手配の程、お願いいたします。

クローク

クロークはありませんので、お荷物は各自の責任で管理してください。

ー一般発表の演者へのお願いー

1. 一般発表での演者は開始時間 30 分前までに受付を必ず済ませて下さい。
2. 一般発表での演者は前演者の発表開始時までに必ず次演者席へお座り下さい。
3. 一般発表での時間は、発表時間が 8 分、質問時間が 2 分の計 10 分です。呼び鈴は 7 分に 1 回、8 分に 2 回、10 分に 3 回鳴ります。また発表時間を厳守してください。
4. 発表形式は、PowerPoint を使用した液晶プロジェクターによる一面映写を原則とします。
5. 発表時の PC は会場以外のものを使用できません。
6. PC のシステムは Microsoft Windows 10、PowerPoint は Microsoft PowerPoint2021 を使用します。
7. 発表中のスライド操作は発表者の責任において行って下さい。
8. 午前中の発表の方は 9:20 までに、午後の発表の方は 13:00 までに発表会場の PC に移行してデータをご確認ください。試写用の PC は用意していません。記録媒体（USB メモリ、SD カード）のエラーがあった時のために、バックアップデータもご持参ください。

ー一般発表の座長へのお願いー

1. 座長は開始時間の 15 分前に次座長席へ、必ずご着席下さい。
2. 1 演題の持ち時間は 10 分(発表 8 分、質問 2 分)です。時間延長は運営に支障を来すので、時間管理をよろしくお願いいたします。
3. もしも時間内に討論が終わらない場合には、会場の外で個人的に行うように指示してください。

一般発表プログラム及び座長

10月20日（日） 710会議室

時間	演題	座長
9:40～	柔道整復師養成課程の臨床実習が学生の自己効力感に与える影響	藤本 浩一 (東京海洋大学)
9:50～	臨床実習が柔道整復を学ぶ大学生の情動知能に与える影響	
10:00～	市民ランナーの衛生観念 —トレーナールーム利用者の例—	高須 英世 (高須整骨院)
10:10～	八木寅次郎師の医師法違反事件	

時間	演題	座長
14:50～	59回北海道空手道選手権大会救護活動報告 —救護活動における救護情報の取り扱い—	古賀 智 (ぜんどうじ整骨院)
15:00～	搬送時の負傷者情報に関する研究 —救護活動における施設管理者が必要とする情報—	
15:10～	青年期の腰痛と関節可動域、身体活動量、座位時間の関係	行田直人 (帝京科学大学)

第26回日本スポーツ整復療法学会大会 抄録集

主催：日本スポーツ整復療法学会

会期：2024年10月20日（日）

【大会実行委員会事務局】

日本スポーツ整復療法学会北海道支部

（〒069-0852 北海道江別市大麻東町 29-1 東町整骨院内）

E-mail: jsspot.hb@gmail.com

10月20日（日）10:30～12:00

教育講演

モーグルスキーにおけるPhysio Trainerの役割 ～評価を中心に～

小谷 征輝 先生（(OMPT BodyCreate 代表, 理学療法士, OMPT)

モーグルスキー競技は、コブの連続した急斜面を高速で滑走し、コース中に設けられた2つのエア台でエアと呼ばれる空中演技を行う採点競技になります。モーグルスキーにおける外傷は膝関節、足関節、肩関節が多く、障害では腰痛症、頸部痛、鵠足炎が報告されています。我々Physio trainerの役割は、トレーニングおよび試合に向けた体調管理、障害の予防および障害の発生後は、復帰までの指針を示し、トレーニング指導をする必要があります。モーグルスキー競技にのみならず、様々なスポーツにおいて問題となることが多い、腰部・骨盤・股関節周囲の疼痛に関して、腰痛症における評価について紹介します。

腰部に出現する疼痛は、筋・筋膜、椎間板、椎間関節を由来とし、骨盤帯、股関節も関連することが多くあります。腰痛の評価は、問診・視診から問題部位の推論、症状の誘発軽減テストにより問題部位の特定、理学的検査による問題組織の同定の段階を経ます。問題組織が明確になることにより適切な運動療法の処方が可能となり、競技復帰までの指針も明確になります。

本講演では、実際に腰痛を有する選手を提示しながら、評価手順を紹介させていただきます。

（プロフィール）

小谷 征輝

- ・2001年 理学療法士免許 取得
- ・2012年 整形徒手理学療法士（OMPT, KE-OMT）取得
- ・2016年 日本理学療法士協会 認定理学療法士（徒手理学療法） 取得
公益財団法人日本スケート連盟強化スタッフ「医学スタッフ・トレーナー」
公益財団法人日本オリンピック委員会強化スタッフ（医・科学スタッフ）
- ・2019年 OMPT BodyCreate 代表
- ・2022年 韓国モーグルスキーナショナルチームメディカルトレーナー
- ・2024年 北翔大学大学院 生涯スポーツ学研究科博士後期課程 修了 スポーツ科学博士
- ・日本理学療法士協会会員
- ・日本運動器理学療法学会会員
- ・日本運動器徒手理学療法学会会員
- ・日本筋骨格系徒手理学療法研究会評議員
- ・マニュアルセラピー研究会理事
- ・IFOMPT 会員
- ・日本バイオメカニクス学会会員

10月20日（日）13:10～14:40

特別講演

北海道の高齢者運動教室「地域まるごと元気アッププログラム」について

上田 知行 先生（北翔大学教授）

「地域まるごと元気アッププログラム」は、北翔大学とコープさっぽろ、NPO 法人ソーシャルビジネス推進センターが連携し、介護予防の運動教室である「まる元運動教室」を軸にした地域の健康づくりに取り組む活動です。2010年に赤平市で始まり、現在は27の市町村から委託を受けて実施しています。NPOは事業のコーディネートや運動指導を行います。コープさっぽろは運動指導を行う健康運動指導士の雇用と、雇用した健康運動指導士をNPOへ出向させます。北翔大学は健康運動指導士の育成と、参加者の体力の分析結果に基づき、運動プログラムの立案を指導者へ提案します。現在本学を卒業した10名の健康運動指導士が北海道の各地域に赴任し、合計1600名程度の参加者に「頭の体操」や「体の体操」を指導しています。参加者からは「膝や腰が楽になった！」などの効果を実感する声や、「みんなと集まって楽しく運動ができてうれしい！」などの声が自治体に届き、高い信頼を得ています。現在、北海道の地方紙である北海道新聞が「やってみよう！『まる元』体操」を連載しており、多くの読者から問い合わせなどの反響が届いています。

「まる元運動教室」のほかにも、地域住民の体力や認知機能を調査する「いきいき体力測定会」やボランティアの方が安全に体操を指導できる「ゆる元体操」指導者養成講座を実施しています。「いきいき体力測定会」や「ゆる元体操」には、健康運動指導士を目指す学生、福祉の分野で活躍することを目指す学生が参加し、先輩の健康運動指導士などから指導を受けながら将来への学びを深めています。本講演ではこのビジネスモデルについて実演を交えてご紹介させていただきます。

（プロフィール）

上田 知行

学歴

1990年 日本体育大学卒業

2013年 小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻修了（経営管理修士）

資格等

1990年 中学校・高等学校教諭一種免許（保健体育）

1993年 健康運動指導士（財団法人健康・体力づくり事業財団）取得

現職

北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科 教授

社会活動

日本健康運動指導士会北海道支部 支部長

NPO 法人ソーシャルビジネス推進センター 理事長

10月20日(日) 15:20~16:00

支部長講演

日本スポーツ整復療学会ができるまでの小史

小野寺 恒己 先生(副会長、事務局長、北海道支部長)

Key words : 日本接骨学会、日本柔道整復・接骨医学会、柔道整復学、スポーツ科学

【はじめに】

スポーツ科学と柔道整復学の学際領域の学術団体として、1999年に日本スポーツ整復療学会(以下「JSSPOT」)が発足した。設立から四半世紀を過ぎ、設立に至る経緯を記録として残し後世に伝える必要がある。

【方法】

片岡利正氏(著者の師匠・雇用主、1988年当時の(社)日本柔道整復師会(以下「日整」)の監事(5期10年間)、後に相談役。当学会設立時の相談役)からの口伝と著者の記憶及び著者が保有する一次史料を基にした。

(1) 柔道整復学に関する小史

【(社)日本柔道整復師会(以下「日整」)】

日整は「日本接骨学会」と「柔道大会」を同時開催し、その経費が膨大なものとなっていたことと合わせ、職能集団による「勉強会」から、正式な学術団体を発足することとし、1991年7月より、設立準備委員会が開催され柔道整復に理解のある荻島秀雄氏(高島平整形外科医院:医師)や、片岡利正氏の弟である片岡幸雄氏(千葉大学教授、当学会設立時から永年の理事長)が委員となった。¹⁾また、片岡利正氏のもう一人の弟である片岡繁雄氏(北海道教育大学教授、当学会設立時の理事)は日整の学術的調査に協力していた²⁾。

【日本柔道整復・接骨医学会(以下「JSJT」)】

1992年に柔道整復学を核とした学術団体として発足し、第1回目の総会で9つの分科会も発足した。

(2) 柔道整復学とスポーツ科学との関わり

『スポーツ科学分科会』

JSJTの「スポーツ科学分科会」は、世話人に片岡幸雄氏、事務局に佐野裕司氏の体制で、第3回学術大会以降、大会での発表に向けて分科会活動を活発化した。第1回研修会の東京都の「多摩スポーツ会館」での開催以降、毎年実験研究を中心に開催され、その抄録作成や発表方法等について両氏による指導がなされた。

【スポーツ科学講習会】

柔道整復師のスポーツ活動への積極的な貢献を目論んで(財)柔道整復研修試験財団が「研修」も事業内容に含んでいることから、「スポーツ科学講習会」を東京と大阪で開催した。そのカリキュラム作成や講師の選任には講習会の委員長であった片岡幸雄氏や片岡繁雄氏の多大な尽力があった。後に認定のための団体であるJATACが設立された。

(3) 学術団体執行部役員の選任

【日本柔道整復接骨医学会第7回学術大会(1998年)】

JSJT第7回学術大会の評議員会及び総会において、某理事がこれまでの運営に対する批判的内容の書面を次期理事候補者及び評議員に配布した。総会ではその批判文書を筆者に読み上げさせるなど役員の承認に関して総会は混乱し、会長候補も辞退するという事態になった。この後、1999年5月までに、後にJSSPOTの会員となった31名が退会者名簿に掲載されていた。

【学会発表・論文作成の指導】

大学及び大学院において研究指導がなされるが、著者の記憶では、1994年筑波大学が社会人特別選抜枠を創設して以降、大学院の増加も相まって大学院への社会人入学が増え始めた。しかし就業柔道整復師にとってまだ進学ハードルが高かった時期に、JSJTにおいて片岡幸雄両氏及び佐野裕司氏及び片岡繁雄氏により研究指導がなされた。それは、引き続きJSSPOTでも行われ、北海道においては第6回大会まで大学教員を含めた研究会が頻繁に開催されていた。

(4) 柔道整復学とスポーツ科学の学際

【日本スポーツ整復療法学会の発足】

JSSPOTはスポーツ科学と柔道整復学の学際的領域を研究範囲とする学術団体として1999.5.1に設立し、400名近くの大学研究者と臨床家が集まった。

【文 献】

- 1) 柔道整復・接骨医学第1巻第1号,1993
- 2) 片岡繁雄ら日本柔整師会柔整基本問題検討協議会、「学校事故と接骨院（柔道整復師）に関する全国調査」、日本柔道整復師会、生涯教育指導者講習会,1994年

(プロフィール)

小野寺 恒己

学歴

1988年 北海道柔道整復専門学校 卒業

2013年 北翔大学大学院 生涯スポーツ学研究科修士課程 修了（修士（スポーツ科学））

資格等

1988年 柔道整復師免許

1995年 NPO-JATAC ATC

2002年 柔道整復専科教員講習修了

現職

1991年～ 東町整骨院（開設）

2024年～ 札幌スポーツ&メディカル専門学校 柔整科 非常勤講師

社会活動

2007年～ 北海道整骨師会 副会長

2013年～ 北翔大学淑萃会生涯スポーツ学研究科OB会 代表

2023年～ 日本スポーツ整復療法学会 副会長・事務局長

一般研究発表

演題番号 1-5

活動報告演題 1-2

演題 1

柔道整復師養成課程の臨床実習が学生の自己効力感に与える影響

小黑正幸（帝京科学大学）、戸部悠紀（帝京科学大学）、行田直人（帝京科学大学）

キーワード：自己効力感、セルフ・エフィカシー、GSES、臨床実習

【目的】自己効力感とは、A. Bandura によって提唱された概念である。自己効力感が高いと、必要な行動を行う可能性は高くなり、困難にあっても諦めにくいと考えられる。これは柔道整復の教育、臨床においても重要な要素と考えられ、可変的であることから、臨床実習という現場を体験することにより、柔道整復を学ぶ大学生の自己効力感がどのように変化するかを検証することを目的とする。

【方法】対象は参加型臨床実習に臨む大学4年生77名。臨床実習の開始前後に質問紙「一般性セルフ・エフィカシー尺度（以後、GSES）」にて自己効力感を測定、点数化（0～16）し、その変化を分析する。

【結果】GSESの得点は実習前6.16から、実習後7.48へと有意に上昇した（ $p<0.00$ ）。また、因子別の得点分析では、「行動の積極性」が7点中2.66から3.10に、「能力の社会的位置づけ」が4点中1.49から2.30にいずれも実習後に有意に上昇したが（ともに $p<0.00$ ）、「失敗に対する不安」に有意な変化はみられなかった。

【考察】実習後得点は有意に上昇したが、自己効力感の5段階評定では、「普通」の範囲にとどまった。しかし、得点分布では自己効力感が「普通」より高い得点者数は実習前の20名から31名に増加し、「普通」より低い得点者数は28名から18名に減少した。これは、A. Bandura が自己効力感を高める要因として挙げた中で最も有効であるとされる自己の成功体験を、多くの学生が臨床の場で経験したことが大きく影響したと考えられる。

【結論】柔道整復を学ぶ大学4年生を対象に、臨床実習前後で自己効力感の調査を行った。結果、自己効力感の実習後有意に上昇した。自己効力感は自然発生的に生じるのではなく、何らかの経験をし、努力し、それを乗り越えて得られる成功体験により自ら作り出されるものである。より適正な難易度で、多くの成功体験を提供できる参加型臨床実習が、柔道整復を学ぶ大学生の自己効力感を高めるのに重要であると考えられた。

演題 2

臨床実習が柔道整復を学ぶ大学生の情動知能に与える影響

戸部悠紀（帝京科学大学）、小黑正幸（帝京科学大学）、行田直人（帝京科学大学）

キーワード：柔道整復師、臨床実習、情動知能、EQS

【目的】柔道整復師の養成において重要なことの一つに、患者を中心とした周囲の人々の気持ちを理解するなどのコミュニケーション能力の向上があげられる。そのためには、その指標となる情動知能を育む必要があると考えられる。そこで本研究では、臨床実習にその効果があるとする小黑らの研究(2022)を追認する形で、情動知能スケール(以下：EQS)を用いて臨床実習が学生の情動知能に与える影響の調査を目的とする。

【方法】対象は、本研究に同意を得たA大学柔道整復学科に所属する2024年度の4年生74名。B接骨院での臨床実習の前後に、質問紙EQSを用いて各領域の項目の得点率を調査した。

【結果】EQSの3大領域の全てにおいて平均得点値は実習後に上昇した。対応領域において最も高い得点は「対人対応領域」であった。対応因子において最も得点率が上昇した項目は状況対応領域の対応因子「状況洞察」であり、次いで同領域の「リーダーシップ」「状況コントロール」であった。

【考察】医療従事職を目指す者の素養として望ましいとされる対人対応領域が高得点となり、先行研究と同様の結果が追認された。今研究において有意な得点率上昇を示した状況対応領域の対応因子3項目については、接骨院内での臨床実習における成功体験や、患者対応、2022年度には実施しなかった臨床実習研究発表への準備等、普段の学内とは違った環境の中で周囲の事柄にアンテナを張り、能動的に自らが考え、表現するという経験を積んだ事が得点率の上昇に影響したものと推察する。

【結論】柔道整復を学ぶ大学4年生74名の情動知能傾向についてEQSを用いて調査した結果、臨床実習後の全項目の得点率が有意に上昇し、臨床実習が職業理解のみならず、情動知能育成に良い影響を与える可能性が示唆された。

活動報告演題 1

市民ランナーの衛生観念 — トレーナールーム利用者の例 —

小野寺恒己（東町整骨院）

キーワード：衛生観念、市民ランナー、トイレ、ウォシュレット、他人の汗

【目的と背景】COVID-19によるパンデミック以降、衛生観念が世界中に広まったと思料される反面、我が国においては、第5類感染症に移行以後、未だ医療機関におけるマスク着用が常識であるのに対し、社会生活でのマスク着用や手指消毒が疎かになっている。これはパンデミックを経験しながらも、特定条件下での他者への配慮の欠如だと考えられる。本報告は市民ランナーの衛生観念について検討した。【方法】第32回原始林クロスカントリー大会トレーナールーム（以下「TR」）利用者93名を対象にトイレ使用時の便座及びウォシュレットの使用、TRのベッドの他人の汗について質問紙調査を実施した。【結果】当日の天候は快晴で最高気温は約30℃、風は少ない気象条件であった。回答者数は42名（45.2%）であった（スタート前利用者中67.3%、ゴールイン後利用者中22.4%）、特にゴールイン後の利用者の回答者数に期待したが低率であった（スタート前が31名、ゴールイン後が11名。男性35名、女性7名）。ベッドの他人の汗が「気になる・どちらかといえば気になる」が24名（57.2%）、「どちらかといえば気になる・気になる」が15名（35.7%）であった。トイレの便座及びウォシュレットの使用とTRベッドの他人の汗についての衛生観念に係る性は見いだせなかった。【考察】パンデミックは、感染予防のための「飛沫・接触・ソーシャルディスタンス・（換気）」が注意喚起され、「マスク警察」なる輩も散見されたが、「喉元過ぎれば暑さ忘れる」の諺通り、マスク着用のTR利用者は少ないように感じた。パリ五輪の陸上競技（男子200m）にCOVID-19に感染し発症しながらも銅メダルを獲得したことが報道され1ヶ月も経過していない時期であってもゴールイン後に、「マスクをせず」、「汗が噴き出る状態」のままTRでボディーケアを求めるランナーの衛生観念がコロナ禍以前に戻ったことを示唆している。

演題 3

八木寅次郎師の医師法違反事件

柔道整復師前史
草野久一（東北）

キーワード：医制、従前接骨業

【目的】

明治の医制の公布後、接骨、ほねつぎは接骨科医師更に整形外科医となったが市井では従前接骨師や武道家施術者がその多くを担っていたが取締りが行われて医師法違反事件起こり無罪を訴えた。

【方法】

名古屋大学法学部の八木寅次郎医師法違反事件の紹介文を知り再度、時代を鑑み現代と裁判要旨を考察した結果以下の事がわかった。

【結果】

裁判で敗訴したが、接骨は（従前接骨）医療一部行為者として認定された。多くの怪我をした市井では済世救民の精神で従前接骨師や武道家施術師の利用者が多くみられた、更に接骨医の制度の運動が過熱した柔道整復師と言う制度を確立した。

【考察】

明治維新後様々な制度改革を行ったが西洋医学も東洋医学もお互いに万全でなく、補佐しあって済世救民なると考えられた。

【結論】

柔道整復師の制度を起こすに様々な困難があったがひとえに誰かの為にと武道家施術師の八木寅次郎師の逮捕起訴は、克己殉公であり大正九年の制度成立に大きく邁進した。

活動報告演題 2

第59回北海道空手道選手権大会救護活動報告
—救護活動における救護情報の取り扱い—

佐藤勇司（佐藤接骨院）、小野寺恒己（東町整骨院）

キーワード：空手道大会、救護、救急搬送、情報共有

【目的】柔道整復師等がスポーツ大会の主催者から救護担当を依頼されることがある。大会中の外傷に対して応急処置を行う場合には、問診、視診、触診、徒手検査の後評価を行い、試合継続の可否の判断が必要な場合もあり、また、重症例においては、救急搬送を依頼することもある。救急搬送する場合の負傷者である患者の情報提供は、救護担当者から消防署救急司令および救急隊員、さらにチーム責任者、大会主催者との情報共有が望まれ、さらにスポーツ施設の責任者にも及ぶ。本報告は、救護活動における症例を報告するとともに、救急搬送時依頼時の状況を報告し、情報の取り扱いのあり方への基礎資料の一助となることを目的とした。

【方法】第59回北海道空手道選手権大会（令和5年）において、救護担当として応急処置を行なった症例を対象として、救護内容と応急処置内容を取りまとめた。

【結果】応急処置を行なった人数は、大会1日目が5名、2日目が14名であった。負傷部位では下肢および頭部・顔面部が各9名であった。そのうち脳震盪が1名であった。試合中に対応を求められたのが7件であった。

【考察】著者らのこれまでの報告では顔面部の外傷が多い傾向であったが、令和5年度の大会では下肢の外傷も散見された。少子高齢化により参加者が減少傾向により、外傷の重症度も過去に比べると重症の症例が少なくなったと考えられた。救急搬送の脳震盪の1例は、まず施設報告し、施設から119番通報を行わせた。その後、施設側から詳細の詳細を求められ、情報提供を行い、その後大会主催者に報告した。

【結論】スポーツ大会において、患者の情報は、個人情報保護法において要配慮個人情報であるが、安全管理者としてのチーム責任者・大会主催者・スポーツ施設管理者との共有のあり方の検討が必要である。

演題 4

救急搬送時の負傷者情報に関する研究
—救護活動における施設管理者が必要とする情報—

小野寺恒己（東町整骨院）、佐藤勇司（佐藤接骨院）

キーワード：救護担当、救急搬送、情報

【目的】スポーツ大会やイベントで救護搬送する際は、施設管理者に救急搬送を依頼したことを報告するべきであるが、施設管理者は、安全管理上事故内容を把握する必要がある。本研究は、救護担当者が知るべき施設管理者が必要とする情報を抽出することを目的とした。

【方法】北海道内11振興局管内に所在する9箇所の体育館に質問紙法により救急搬送時に情報収集する21項目について調査した。さらに1箇所の消防署司令から通報時に必要とする情報を聴取した。

【結果】施設管理者が必要とした項目で高率だったのは、負傷者の氏名・年齢・負傷場所が9件（100%）で、次いで負傷者の住所・電話・負傷時間・負傷原因（状況）・負傷の程度が8件（88.9%）、次いで負傷者の所属団体名と搬送先病院名が6件（66.7%）等であった。項目数では、21項目全てから8項目（平均12.2項目であった。）消防司令が救急搬送依頼の電話対応で必要としている項目は、負傷者の年齢・性別。負傷態様・主訴・現病歴及び既往症であった。また、救急搬送要請における電話対応は、施設管理者経由よりも負傷状況を把握した者による対応を求めており、負傷者の詳細は救急隊員の判断に任せていた。

【考察】スポーツ等施設管理者は施設の安全管理上、施設内の事故の責任を問われることがあるが、競技等の活動中の事故の責任は運営者等の安全管理になる。携帯電話の普及によりどこからでも救急要請が可能となり、施設管理者に救急要請の事実を知らせないと救急車の進入口を含めスムーズな搬送に繋がらないことがある。一方で救急要請に必要な情報は施設管理者を介せずに救護担当者による情報提供が重要である。負傷者情報は要配慮個人情報でもあることから、取り扱いは慎重に行う必要がある。

演題 5

青年期の腰痛と関節可動域、身体活動量、座位時間の関係

諸星 亮（東京海洋大学大学院）、藤本浩一（東京海洋大学）、千足耕一（東京海洋大学）

キーワード：腰痛、関節可動域、身体活動、座位時間、HRV

【目的】本研究の目的は、青年期の腰痛と関節可動域、休日の身体活動量、座位時間、心拍変動（HRV）の関係について明らかにすることである。

【方法】本研究の対象は、大学生29名（ 20.9 ± 1.8 歳）である。調査内容は、運動歴、運動習慣、腰痛の状態、関節可動域、座位時間、身体活動量、安静時心拍間隔、心拍数とした。腰痛の状態についてはJLEQ、質問紙、脊椎骨棘突起及び腰筋の圧痛検査を用いた。関節可動域は、体幹側屈、下肢伸展挙上、足関節背屈、踵臀距離の測定を行った。座位時間、身体活動量は、ウェアラブルデバイスを用いて24時間内の座位時間、心拍数、METsを計測した。心拍変動については心拍間隔を6分間測定し、PNS index（副交感神経系）、SNS index（交感神経系）を算出した。脊椎棘突起及び腰筋の圧痛検査の結果からクラスター分析を行い腰痛群16名、非腰痛群13名に分け、その後Fisherの正確確率検定及びMann-WhitneyのU検定を用いて2群間の比較を行った。

【結果】運動歴、運動習慣、HRV、休日の身体活動量、座位時間については、腰痛群、非腰痛群の間に有意な差は認められなかった。関節可動域については、右下肢伸展挙上（腰痛群 62.5° 非腰痛群 80.4° ）、左下肢伸展挙上（腰痛群 60.6° 非腰痛群 80.0° ）、右足関節背屈（腰痛群 10.9° 非腰痛群 15.0° ）、左足関節背屈（腰痛群 9.4° 非腰痛群 14.1° ）、右踵臀距離（腰痛群 13.8cm 、非腰痛群 10.5cm ）の項目で有意差が認められた。

【まとめ】腰痛群と非腰痛群の比較において、腰痛群では股関節伸展筋の柔軟性、足関節底屈筋の柔軟性、膝関節伸展筋の柔軟性の低下が考えられた。HRVについては、腰痛群と非腰痛群の比較において有意差は認められないものの、腰痛群では交感神経が優位となる傾向が認められた（SNS index 腰痛群 1.46、非腰痛群 0.49）。

大会開催地および発表演題数

	地区	会 場	期 間	演題数
第1回	関東	東京商船大学越中島会館（東京）	1999年9月18-19日	35
第2回	関東	東京商船大学越中島会館（東京）	2000年10月28-29日	44
第3回	関西	大阪電気通信大学寝屋川校舎（大阪）	2001年10月27-28日	42
第4回	関東	東京商船大学越中島会館（東京）	2002年10月26-27日	42
第5回	関西	大阪体育大学（大阪）	2003年10月18-19日	32
第6回	北海道	北海道自動車短期大学（北海道）	2004年9月19-20日	38
第7回	関東	千葉大学西千葉キャンパス（千葉）	2005年10月29-30日	38
第8回	関東	東京工業大学大岡山キャンパス（東京）	2006年10月21-22日	44
第9回	関東	千葉大学西千葉キャンパス（千葉）	2007年10月20-21日	39
第10回	関東	東京海洋大学品川キャンパス（東京）	2008年10月25-26日	41
第11回	北信越	大原学園菅平研修所（長野）	2009年10月24-25日	38
第12回	関東	国士舘大学永山キャンパス（東京）	2010年10月23-24日	29
第13回	西日本	明治国際医療大学洛西キャンパス（京都）	2011年11月12-13日	35
第14回	東日本	専修大学神田キャンパス（東京）	2012年10月25-26日	26
第15回	西日本	久留米大学御井キャンパス（福岡）	2013年11月3-4日	32
第16回	東日本	日本大学桜門会館（東京）	2014年10月25-26日	20
第17回	西日本	宝塚医療大学（兵庫）	2015年10月24-25日	26(10)
第18回	東日本	かでる2.7（道民活動センター）（北海道）	2016年10月29-30日	23
第19回	西日本	明治東洋医学院専門学校（大阪）	2017年12月9-10日	20
第20回	東日本	東京海洋大学品川キャンパス（東京）	2018年10月20-21日	12(5)
第21回	西日本	朝日医療大学校（岡山）	2019年10月13-14日	16
第22回	東日本	誌上発表	2021年3月31日	5
第23回	西日本	オンライン	2021年10月24日	5
第24回	東日本	帝京科学大学（東京）	2022年11月6日	8
第25回	西日本	明治東洋医学院専門学校（大阪）	2023年11月12日	10

第17回の（ ）内は、学生ポスター演題数
 第20回の（ ）内は、学生発表コンペ演題数

編集後記

日本スポーツ整復療法学会第26回大会号をお届けいたします。第26回大会においても、大会号を電子的配布とさせていただいております。大変お手数をおかけいたしますが、各先生方にての印刷またはパソコンの画面等で閲覧しながらの学会参加をお願い致します。

第26回学会大会号には、教育講演、特別講演、支部長講演の抄録、および一般発表の抄録を掲載いたしました。学会大会での有意義な討論・質疑応答が実施されますよう、予めお目通しください。

また、いつものお願いではありますが、本学会大会で発表される先生方におかれましては、その研究を深化させ、学会誌へのご投稿をお願いできればと存じます。

会員の先生方と北海道にてお目にかかれましてを楽しみに致しております。

(編集委員長 千足耕一)

編集委員会

千足耕一 (委員長)

菊地俊紀 藤田英二 蓬郷尚代

The 26th congress of JSSPOT

October 2024

禁無断転載

日本スポーツ整復療法学会 第26回大会号

2024年10月1日発行

発行者 日本スポーツ整復療法学会 会長 佐竹弘靖

発行所 日本スポーツ整復療法学会 事務局

〒069-0852 北海道江別市大麻東町29-1 東町整骨院内

Email: infojsspot@gmail.com

The 26th congress of JSSPOT

October 2024

The Japanese Society of Sport Sciences and Osteopathic Therapy (JSSPOT)